

テーマ：消費者物価指数（全国・2018年5月）  
 ～エネルギー以外の低迷続く～

発表日：2018年6月22日（金）

第一生命経済研究所 経済調査部  
 担当 主席エコノミスト 新家 義貴  
 TEL：03-5221-4528

（単位：％）

		全国					東京都区部				
		総合	生鮮除く総合	食料(酒類除く)及びエネルギー除く総合	石油製品	生鮮食品を除く食料	総合	生鮮除く総合	食料(酒類除く)及びエネルギー除く総合	石油製品	生鮮食品を除く食料
		前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比
17	1月	0.4	0.1	0.1	9.2	0.6	0.1	▲ 0.3	0.0	11.7	0.5
	2月	0.3	0.2	▲ 0.1	13.2	0.7	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.1	14.4	0.4
	3月	0.2	0.2	▲ 0.3	16.2	0.7	▲ 0.4	▲ 0.4	▲ 0.4	19.7	0.3
	4月	0.4	0.3	▲ 0.3	12.8	0.8	▲ 0.1	▲ 0.1	▲ 0.4	14.3	0.7
	5月	0.4	0.4	▲ 0.2	11.2	0.8	0.1	0.1	▲ 0.2	11.6	0.6
	6月	0.4	0.4	▲ 0.2	6.6	0.9	0.1	0.0	▲ 0.4	7.1	0.5
	7月	0.4	0.5	▲ 0.1	6.6	0.9	0.2	0.2	▲ 0.3	8.1	0.6
	8月	0.7	0.7	0.0	7.6	0.9	0.5	0.4	▲ 0.1	9.6	0.5
	9月	0.7	0.7	0.0	7.2	1.0	0.5	0.5	▲ 0.1	8.3	0.6
	10月	0.2	0.8	0.0	9.4	1.0	▲ 0.1	0.6	0.0	10.6	0.7
	11月	0.6	0.9	0.1	10.1	1.1	0.3	0.6	0.1	11.4	0.7
	12月	1.0	0.9	0.1	9.0	1.2	1.0	0.8	0.2	9.9	0.9
18	1月	1.4	0.9	0.1	7.3	1.3	1.3	0.7	0.3	8.8	0.9
	2月	1.5	1.0	0.3	9.2	1.2	1.4	0.9	0.4	10.7	1.0
	3月	1.1	0.9	0.3	7.0	1.1	1.0	0.8	0.4	7.6	0.9
	4月	0.6	0.7	0.1	7.0	1.1	0.5	0.6	0.3	7.2	0.7
	5月	0.7	0.7	0.1	9.1	1.1	0.4	0.5	0.1	11.0	0.7

（出所）総務省統計局「消費者物価指数」

## ○前月から変化無し

総務省から発表された18年5月の全国消費者物価指数（生鮮食品除く）は前年比+0.7%と、前月と同じ伸びとなった（市場予想：+0.7%）。エネルギー価格が上昇率をやや高めた一方、エネルギー以外が若干鈍化し、全体としては変化無しという形である。

前回4月分が弱い結果となり、新年度入りに伴う価格改定の動きが不発に終わったことが示されていたが、今月もエネルギーを除く部分で停滞感がみられており、企業の値上げに対する慎重姿勢の根強さを改めて確認させる結果となった。

## ○エネルギー以外が弱い

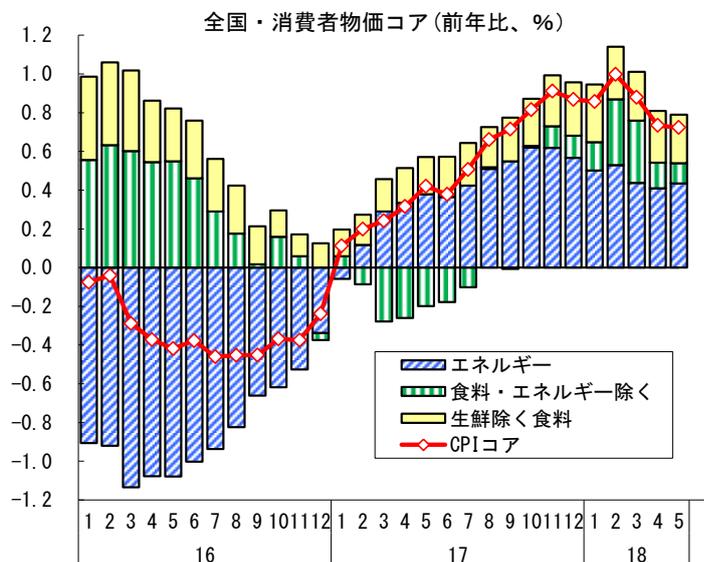
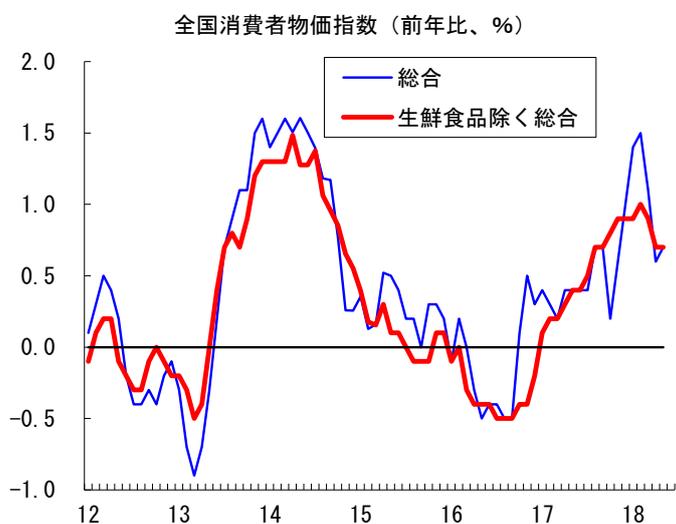
エネルギー価格は前年比+5.6%と、前月の+5.3%から僅かに伸びが高まった（前年比寄与度：4月+0.41%Pt → 5月+0.43%Pt）。電気代・ガス代のプラス寄与が縮小した一方、石油製品価格のプラス寄与が拡大している。石油製品については、ガソリン価格が前月比+2.1%となるなど、原油価格上昇の影響を受けて大きく上昇、前年比でも伸びが高まった（前年比寄与度：4月+0.22%Pt → 5月+0.28%Pt）。一方、電気代については、再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度に基づく上乗せ額の引き上げの影響等から前月比では+1.6%と高い伸びだったが、前年はそれ以上の上昇となっていたことから、前年比では裏が出る形で上昇率が低下、寄与度も縮小している（前年比寄与度：4月+0.15%Pt → 5月+0.12%Pt）。

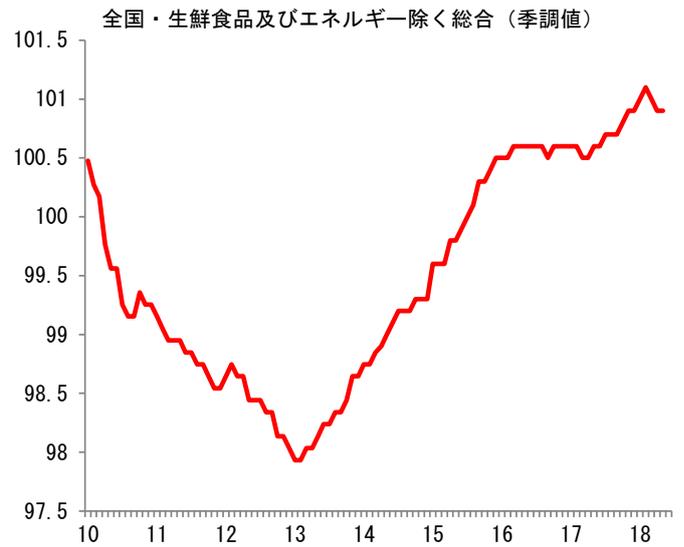
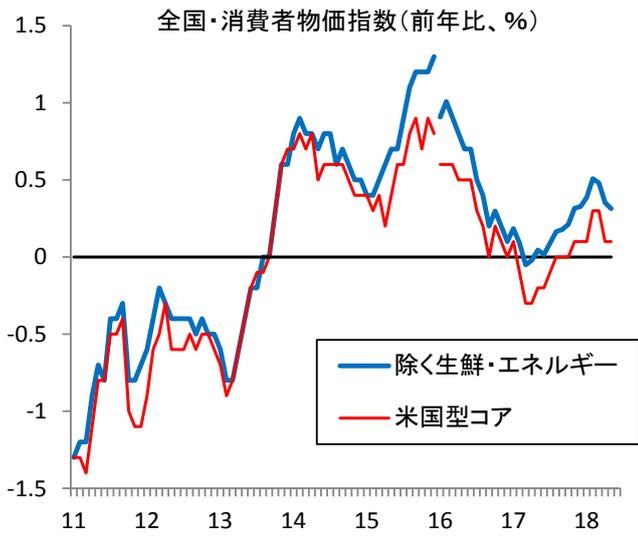
食料品価格（生鮮食品除く）は前年比+1.1%と前月と同じ伸びだった。食料品価格は、16年11月の前年比+0.5%をボトムにじわじわと伸びを高めていたが、18年1月の+1.3%をピークに、2月が+1.2%、3～5月が+1.1%と、ここにきて頭打ち感が出ているように見える。16年末以降に進んだ円安に伴う価格転嫁が続いていたが、その効果が剥落しつつあるのかもしれない。

除く生鮮食品・エネルギー（日銀版コアコア）は前年比+0.3%（4月：+0.4%）と、3ヶ月連続の上昇率縮小となった（小数点第2位までみると、2月前年比+0.51%、3月+0.48%、4月+0.35%、5月+0.31%）。今月特に目立って押し下げた品目は見当たらないが、全体的に力強さに欠ける。また、季節調整値でみると前月比0.0%である。3月（前月比▲0.1%）、4月（同▲0.1%）と2ヶ月連続で低下した後にもにかかわらず5月は横ばいにとどまっており、弱い印象を受ける。これまで季節調整値でも緩やかな改善がみられていたが、ここにきて頭打ち感が出ているようだ。日銀版コアコアについては、「景気回復の持続に伴う需給バランスの改善の影響が顕在化することで緩やかな上昇が続く」と考えるのが自然とは思われるが、企業の慎重姿勢の強さを考えると、リスクは下方方向にあるだろう。

### ○先行きは、前年比+1%程度の推移か

先行きについては、CPIコアはいったん持ち直すとみている。原油価格の上昇を受けてエネルギー価格は先行きプラス寄与の拡大が予想され、これに牽引される形でCPIコアも6月以降は再び上昇率を高める可能性が高いだろう。これから秋にかけて前年比+0.9～+1%程度には戻りそうだ。もっとも、これはあくまでエネルギー価格の上昇によるものであり、前述のとおり、エネルギー以外の部分についてはむしろ足元で改善の鈍さが目立つ状況になっている。エネルギー価格の上昇は景気にとってはマイナスであり、これによる物価上昇は、決して喜べる話ではないだろう。





(出所) 総務省統計局「消費者物価指数」  
 (注) 消費税率引き上げの影響は除いている